

事業名	元気な山川まちづくりの会
事業の特徴	港町を紹介する「まち歩きボランティアガイド」の養成と活動支援（関係機関との連携による活動拠点の提供など自主グループの支援）

実施機関名	指宿市教育委員会事務局社会教育課
連絡先	〒891-0304 鹿児島県指宿市十二町2290番 TEL 0993-23-5100 FAX 0993-23-5000
事業規模	市区町村
事業主体	教育委員会
事業のテーマ分野	まちづくり（ガイドボランティアの育成）

1 事業の概要

「元気な山川まちづくりの会」は、平成20年度指宿市提案公募型補助事業に採択され、その年の5月10日に発足したボランティア活動を主とした「まちおこし」のグループである。

構成員は、指宿市の生涯学習事業で『郷土史』を学んだ者を中心に、「郷土に活気を取り戻したい」と日ごろ思っている者や、「郷土史に関心」を持っている者の20名である。

この会の主な活動は、港町を紹介する常設の「まち歩きボランティアガイド」であるが、これに限らず年度毎に「町おこしの事業」の展開も図っており、その双方の相乗効果をねらっている。



設立総会の場面



交流時の琉球舞踊

平成21年度は、4月にボランティアガイドの発足に加え、11月に「琉球・山川港交流400周年事業」を民間ベースで盛大に実施し、成功を収めている。

2 事業の趣旨、目的

『郷土史』を学ぶ者たちは、日ごろから、郷里の山川地区がかつてのにぎわいがなくなり、何とかしなければと思っていた。そのような矢先の平成19年秋、いぶすき山川港特産市場「活お海道（いおかいどう）」建設決定のニュースが飛び込んで来た。これを機に、山川港地区も少しは活気付くなど誰もが期待をした。

しかし、住民はこれを傍観するだけで良いのだろうか、むしろ、住民も一歩を踏み出すべきではないかと考え、「町おこし」の運動を展開することにした。

「町おこし」は、「まず、郷里の歴史を掘り起こすことから始めるべきだ」との郷土史講師の意見を受け入れ、そこから着手した。その結果、ボランティアガイドの案内で「まち歩き」をしてもらうことを考え、これを中心とした企画を立案した。

この事業によって、住民が故郷に誇りを持ち、地域外の人々には「山川港」の良さを広く知ってもらい、山川港に足を運んでもらえるようになるのではないかと、さらに、住民との交流の場が広がるのではないかと考えた。

この企画をグループで、平成20年度の指宿市の提案型公募補助事業に応募したところ、採択され、第一歩を踏み出すことができた。

3 事業の内容

（1）学習の内容

① 山川港の歴史的遺産・文化的遺産・産業的遺産の掘り起こし

- ア. 郷土史、諸郷土資料から20数件を洗い出し、会員全員で該当物件を見て回った。
- イ. さらに、「まち歩き」の専門家と一緒に現場を2日間にわたり巡回し、ターゲットを絞り込んで本事業のテーマを整理した。
- ウ. ガイド拠点を絞り込み20ヶ所とし、全部回るのに3時間掛かった。
- エ. 探索コースを基本的に2コース作ることにした。さらに、これを基準に観光客の要望に合わせて他に2コースを設定した。

② ガイド拠点の資料の整理

- ア. 各会員が、郷土史やインターネット等で調べ、お互いにすり合わせをしながら整理した。
- イ. 郷土史講師から、ガイド拠点の歴史的な事柄を学んだ。
- ウ. さらに、上記ア、イに基づき資料を整理し、郷土史講師に添削してもらうとともにアドバイスをもらった。

③ ガイドとしての基礎知識の習得

- ア. 県から講師（ガイドの専門家）の派遣をしてもらい、講習を受けた。
- イ. 先輩に当たる「篤姫ガイド」の会長から、実務での注意点などを細かく学んだ。

④ 薩摩藩に関することを中心とした講座の聴講

- ア. 県からの専門講師や「薩摩伝承館」の学芸員などの講座で、薩摩藩に関することを中心に更に知識を深めた。

⑤ 実習の積み重ね

- ア. 座学で学んだことを、各会員がグループに分かれて現場で実習を積み重ね、ガイドとしての力を付けるよう努めた。



会員間の現地研修

（2）学習成果を活用したボランティア活動等の内容及び推進の方法

① 山川港まち歩きボランティアガイド

- ア. 平成20年6月にボランティアガイド希望者を募集し、応募した20名で同年7月末から翌年3月までガイドとして必要な研修を週1回の割合で実施した。その研修に7割以上出席した者にガイド資格を与え、ボランティアガイドとして活動してもらうことにした。
- イ. 平成21年4月、ボランティアガイドの会『いっど、いっが（行くよ、行こう）、山川港の会』を資格取得者14名で発足させた。
- ウ. 県の助成により「ガイド案内」のパンフレットを作成し、訪問者に配布するようにした。
- エ. ボランティアガイド利用希望者には、事前に電話かFAXで申し込みをもらい、受け入れている。（現在実績約800名）

② 「琉球・山川港交流400周年事業」

- ア. 『郷土史』の学習で、琉球侵攻以後の南方貿易により山川港が栄えたことを知った。
また、明治以降沖縄との貿易が途絶えた後、琉球墓を壊し、「西南の役戦没者招魂塚」を建立し、沖縄の人々が墓参りできなかつたことなどを知った。
- イ. 琉球侵攻400周年を機に、過去の怒涛の荒波を乗り越えて新しい交流が始まるよう11

月に『琉球・山川港交流400周年事業』を実施した。この際、沖縄の人々を気遣い、「琉球人鎮魂墓碑」と「望郷の碑」を民間ベースで建立し、沖縄の人々に感謝された。



琉球人鎮魂墓碑



琉球舞踊を奉納

(3) 推進体制等の仕組み

専門家の指導を受けるとともに、地元の観光協会をはじめ指宿市や県の支援を仰ぐことにした。

① 指宿観光協会の対応及び支援

- ア. 「篤姫ガイド」をモデルに基本的な体制づくりや運営方法を学んだ。
- イ. ガイドのユニホームの提供を受けた。

② 指宿市の対応及び支援

- ア. 教育委員会からの支援、県との連携一切、講師の手配、文化ホールの教室の提供等を受けた。

③ 鹿児島県の対応及び支援

- ア. ガイド研修の講師派遣をしてもらった。
- イ. 南薩地域振興局を通じ、先進地域の現地研修や案内パンフレットの作成等助成を受けた。
- ウ. ガイド詰め所の提供を受けた（根占・山川フェリー営業所の2階）。これにより、ガイド利用者の受け入れが可能になった。



ガイド詰め所の開所式



ガイド案内チラシと制服

4 成果と今後の取組

ボランティアガイド発足後1年（平成22年3月31日現在）を経過し、幾つかの課題が浮き彫りになってきた。

その第1は、この会の自立と継続をいかに図るかである。会の運営費は、今まで行政からの補助金や観光協会などの助成金に頼ってきたが、将来もこれが継続される保証は全くない。したがって、現在無料の案内料を有料にしたり、物品の販売などで運営費を稼ぎ出したりする仕組みに変えていきたいと考えている。

2番目には、ガイド利用者の増加をいかに図るかである。今までの主な集客は、他の団体等のイベントに便乗した形で行われた。それゆえに「待ちの営業」であったが、これからは「攻めの営業」に変えていきたい。昨年末には、ホームページも開設した。今後、マスコミの活用やPRチラシの配布などもやっていきたいと考えている。

今年、山川港の特産品である『本枯節』（鯉節）の製造開始から100年目に当たる。この大きな節目に『鯉節製造100周年事業』を展開し、全国にPRできるよう計画中である。

【執筆者の職・氏名】指宿市教育委員会社会教育課 主査 宮地 主悦